

旧朝鮮窒素肥料興南工場の社宅街について

—近代日本における化学工業系企業社宅街の成立と変遷に関する研究 その1—

正会員○辻原万規彦*

9. 建築歴史・意匠-2. 日本近代建築史 建築歴史・意匠

日本窒素肥料, 朝鮮窒素肥料, 野口遵, 社宅, 福利施設

1. はじめに

本研究は、近代日本における化学工業系企業による社宅街の形成や福利施設の建設が、近代日本の都市、特に地方都市の形成に与えた影響を明らかにし、さらに他の業態の社宅街との比較を通じて、特質性や相互の同質性を明らかにすることを目的としている。

社宅研究会編『社宅街 企業が育んだ住宅地』(学芸出版社)では、日本の産業革命において主導的な役割を果たした鉱業や繊維業による社宅街に焦点が充てられ、第一次世界大戦前後から発展を遂げた重化学工業分野、特に化学工業による社宅街は手薄である。

チッソ(株)の前身である日本窒素肥料(株)を中核企業とする日窒コンツェルン¹⁾は、戦前期には新興財閥ながら、日本の15大財閥の一つに数えられ、現在でも有力な幾つかの化学工業系企業の前身でもある。

そこで、本稿では、日本窒素肥料の関連会社である朝鮮窒素肥料(株)²⁾を取り上げ、主力工場が立地していた興南地区の社宅街の様相を明らかにする。

これには、以下のような理由もある。前述の『社宅街』の巻末データベースでは、戦前期に日本の影響下にあった地域における情報は少ない。また、終戦後の都市の発展と変容に、当該の企業が影響を与えてはいないとは言え、継承された点も多い。さらに、国内の事例に比べて史料の散逸が激しく、できるかぎり記録を残しておく必要がある、と考えるからである。

本稿は、主に日本窒素肥料や朝鮮窒素肥料の元社員や家族によって書かれた「日本窒素史への証言」³⁾などの文献に依拠しているが、当時の社宅街やそこの生活には様々な側面がある点に留意する必要がある。例えば、「開書 水俣民衆史」(草風館)などで描かれる様相は大きく異なっているところもある⁴⁾。

なお、本稿では、当時の用語や呼称はそのまま用い、引用文などは原則として現代仮名遣いに改めた。

2. 朝鮮窒素肥料(株)の概要^{5), 6)}

大正15(1926)年1月、赴戦江の水力発電を行うために、朝鮮水電(株)が設立された。取締役社長には日本窒素肥料と同様に野口遵が就任したが、実際には専務取締役の森田一雄らが主導し、西松組が工事を請け負って、昭和4(1929)年11月には送電を開始した。

この電力を使って様々な化学工業を展開しようとして、昭和2(1927)年5月に朝鮮窒素肥料(株)が設立された。同年6月には咸鏡南道の興南で、工場の起工式が行われ、常務取締役の白石宗城らが主導して工事が進められた。昭和5年1月には硫安などの肥料の製造が開始され、前述の朝鮮水電と合併した。さらに、昭和16年には、日本窒素肥料に合併され、終戦まで操業が続けられた。朝鮮には、主力となった興南地区の工場群のほか、永安、阿吾地、青水、南山、水豊(ダム)などにも日本窒素肥料関連の事業所があった。

3. 興南工場の社宅と社宅街

興南地区全体の様子を図1に示す。図1は、(財)野口研究所野口記念史料室所蔵の「興南地区事業地一般図(昭19.1.1現在, 日本窒素肥料株式会社工務部)」(「1947.6.9再トレース」との書き込みあり)に、他の文献⁷⁾などを参考にして加筆したものである。

工場建設前の興南地区は、朝鮮の人々が住む住宅が二、三十軒あっただけであったが、終戦前には、興南工場、本宮工場、竜興工場、火薬工場、亜鉛工場、製錬所などの多くの工場を抱えていた。当初は主に社員社宅のある湖南里と主に傭員社宅のある九竜里だけであったが、工場の増設に伴って社宅も増え、後には、柳亭里や本宮などにも社宅が建ち並んだ。これらの社宅に入居したのは、基本的には日本人に限られ、朝鮮の人々は、興德里、厚農里、鷹峰里などの社宅に入った。両者の社宅には、設備や間取りにも差があった。

興南工場の湖南里と九竜里の社宅街の復原図を図

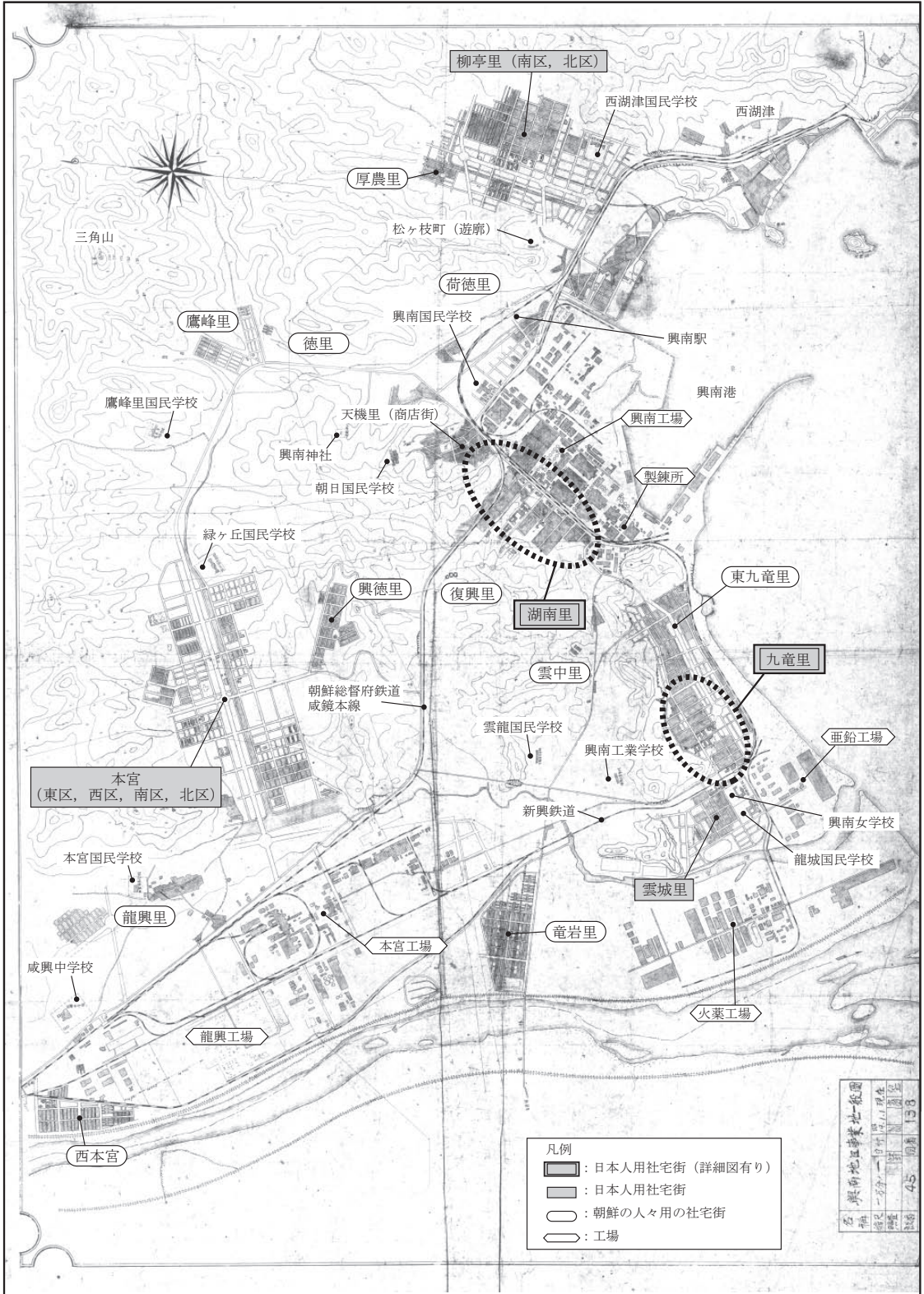


図1 朝鮮窒素肥料(株)の興南地区の概況(昭和19年頃)

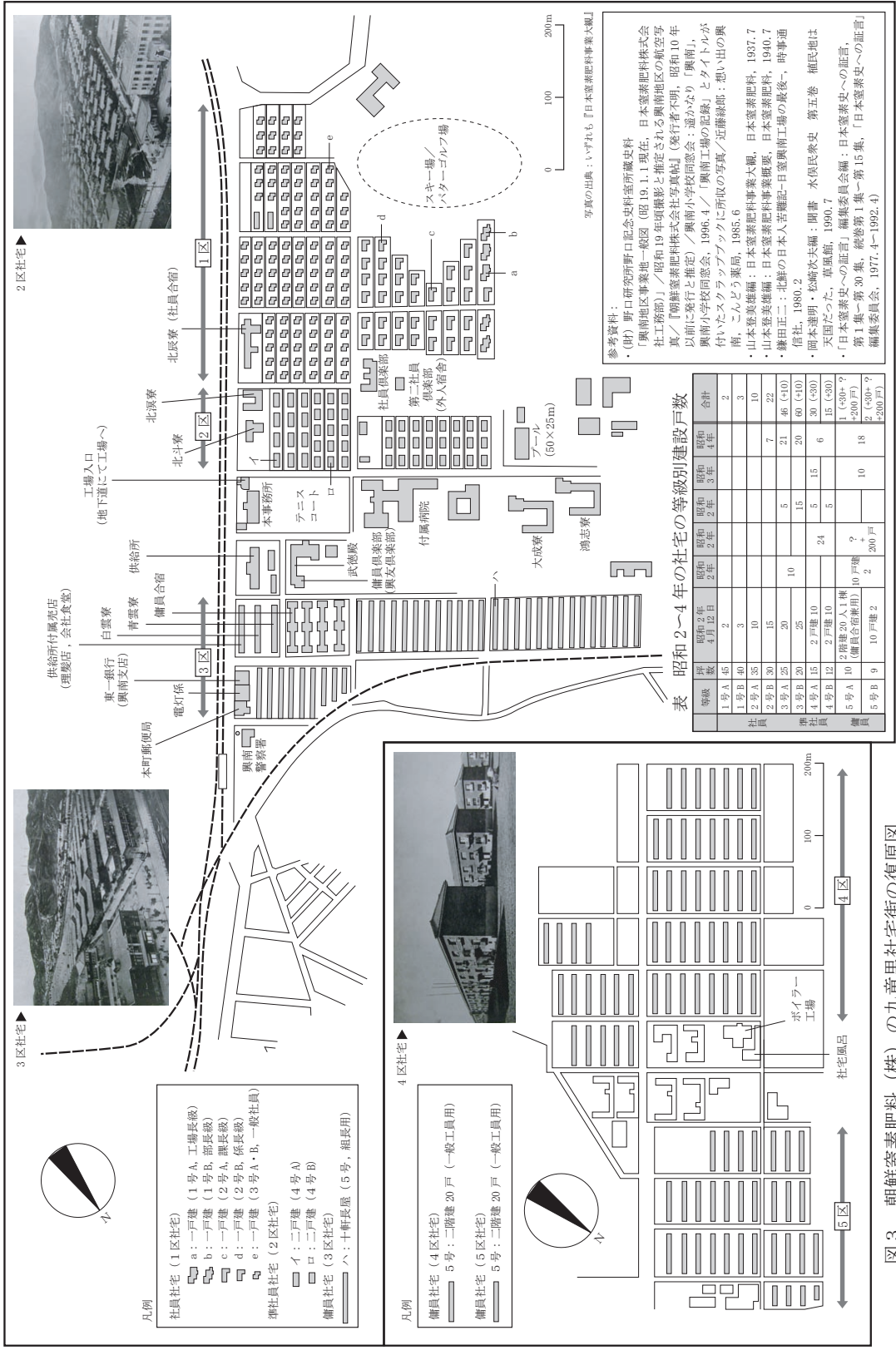


図2 朝鮮窒素肥料(株)の湖南里社宅街の復原図 (昭和10年代後半頃)

図3 朝鮮窒素肥料(株)の九童里社宅街の復原図 (昭和10年代後半頃)

2と図3に示す。社宅は、社員用(1A~3B)、準社員用(4A, 4B)、傭員(5A, 5B)用に分かれ、独身者などが入る合宿もそれぞれ用意されていた(寮と呼ばれることも多い)。図2中の表に、当時の稟議書について紹介されている文献⁸⁾を基に、社宅の等級別建設戸数を示す。ただし、稟議書そのものは確認できていない。社員社宅である1号と2号については、復原図による戸数とほぼ一致し、これらの社宅街は、工場建設とほぼ同時期に完成したと考えられる⁹⁾。

これらの社宅工事は間組が請け負った¹⁰⁾。設計は日本窒素肥料で行った可能性もある¹¹⁾が、詳細は不明である。建設にあたっては、当初から寒冷地対策を考えていたようで¹²⁾、煉瓦造とし、蒸気を用いた地域暖房を備えていた。湖南里こそ工場のプラントからの給気であったが、九竜里、柳亭里、本宮では専用の設備が建設された⁶⁾。また、炊事には電力が使われていた。

また、「日本窒素史への証言」には、湖南里の社宅街は工場に隣接しており、悪臭や汚染物質を多量に含む空気のために木々が育たない、後に建設された柳亭里などの良い環境を羨んだ、などの記述もある。

戦後については不明な点が多いが、工場は朝鮮戦争の際に爆撃で被害を受けたとされ、1992年の訪問記では、社宅街は一部残存していると述べられている。

4. 社宅街における福利施設

工場の建設が始まった昭和2年には仮病院が建設されたが、翌年には湖南里に附属病院の本館が、その翌年に病棟が建設された⁸⁾。また、柳亭里、九竜里、本宮には分院が設置された。

傭員社宅には、共同浴場が建設された。また、準社員社宅では各戸に、傭員社宅では棟ごとに温水が供給されており、洗濯や入浴に用いていた¹³⁾。

日常生活品の供給のためには、供給所が設置された⁸⁾。供給所は、工場の本事務所の隣に本店があり、その隣には付属商店(理髪店と会社食堂などを含む)もあった。ほかに、三中井百貨店や丸善の支店もあった。

娯楽施設としての倶楽部は2つあり、社員倶楽部には工場へ出張した際の社長の宿泊所も設けられた⁸⁾。

教育施設としては、工場建設と同時期に、興南小学校が建設された。敷地は社有地を無償供与し、建設費用は会社が寄附した⁸⁾。なお、警察官駐在所や郵便局

も会社の費用で建設された⁸⁾。

体育施設としては、テニスコート、グラウンド、武徳殿、プール、ゴルフ場などが建設されたが、この中でもプールは社員の発案で、社員の親睦団体である興友会の予算を得て、建設された¹⁴⁾。このような施設を会社側が用意するだけでなく、スケート場なども含めて社員による整備が見られた点は注目できよう。

5. まとめと今後の課題

本稿では、近代日本における化学工業系企業社宅街の成立と変遷を明らかにするための一環として、当時東洋一の工場地帯とも言われた、旧朝鮮窒素肥料の興南地区における社宅街の概要を明らかにし、その一部の復原図を作成した。

今後は、同じく日本窒素肥料に関連する水俣工場や延岡工場の社宅街のほか、朝鮮窒素肥料の他の事業所における社宅街をはじめ、他の化学工業系企業の社宅街の様相を明らかにし、相互の比較を行っていききたい。

謝辞 資料収集にあたっては、財団法人野口研究所総務部主任 川又忠様、チッソ株式会社総務人事部社史編集室 松永一敏様、熊本県立大学附属図書館にご協力頂いた。なお、本報の一部は、平成21年度熊本県立大学地域貢献研究事業(地域振興支援研究)、平成21年度科学研究費補助金(基盤研究(C)、課題番号20560598)によった。

参考文献・引用文献・脚注

- 1) 大塩武：日窒コンツェルンの研究，日本経済評論社，1989.5。
下谷政弘：新興コンツェルンと財閥 理論と歴史，日本経済評論社，2008.3，など。
- 2) 姜在彦編：朝鮮における日窒コンツェルン，不二出版，1985.10。
堀和生：朝鮮工業化の史的分析 日本資本主義と植民地経済，有斐閣，1995.7，など。
- 3) 「日本窒素史への証言」編集委員会編集発行。第1集～第30集，続巻第1集～第15集までの45巻がある(1977.4～1992.4)。以下、「証言，続1，p.1」などと出典を表記する。
- 4) とは言え、第二次世界大戦後の工場接収時には、日本人の社宅と朝鮮の人々の社宅が交換され、戦前期に朝鮮の人々が住んでいた社宅での集団生活を体験した方々も多い。
- 5) 山本登美雄編：日本窒素肥料事業大観，日本窒素肥料，1937.7
- 6) 大島義清ほか：特集 注目の興南工場，化学工業，第2巻，pp.22-101，1951.1
- 7) 鎌田正二：北鮮の日本人苦難記-日窒興南工場の最後-，時事通信社，1980.2。興南小学校同窓会：遥かなり「興南」，興南小学校同窓会，1996.4，など。
- 8) 川村和男による。証言，続4，続14，続15。
- 9) 『開書 水俣民衆史』には傭員社宅の平面図が示されているが、後述の福利施設も含めて確認できる図面が少ないため、不明な点も多く、今後の課題も多い。
- 10) 間組百年史編纂委員会編：間組百年 1889-1945，p.394，1989.12。朝鮮窒素肥料における間組の建設活動については、宮塚俊雄の一連の論考(証言，続4，続5，続8，続11，続13)に詳しい。
- 11) 証言，続4，p.71
- 12) 証言，16，pp.5-6
- 13) 岡本達明・松崎次夫編：開書 水俣民衆史 第五巻 植民地は天国だった，草風館，pp.170-204，1990.7
- 14) 証言，11，pp.118-119